

# ベトナム中部農村における少数民族の就学・就業機会の実態と課題

森川 紗綾

キーワード: 少数民族, カトゥー族, 教育, 純就学率, 就業, 農林業

## 1. 背景と目的

近年、ベトナムの就学率は大きく向上している。後期中等教育の純就学率は1998年の28.6%から2013年には70.7%まで上昇した。主要民族のキン族と比べると低いものの、少数民族の就学率も向上している。しかしながら、少数民族における学校卒業後の非農業就業機会は限定的で、依然として農林業に従事せざるを得ない者が多く、少数民族人口のおよそ半分は貧困線以下の生活をしている。そこで本研究では、農村の少数民族居住地域において、教育普及が進むことにより、どのような教育意識の変遷が起こっているのかを明らかにし、就業における少数民族ならではの課題を整理することを目的とした。

## 2. 対象地域と研究方法

トゥアティエン＝フエ省ナムドン県トゥンロー村ドイ集落を調査対象地とした。ドイ集落にはベトナム中部山岳少数民族であるカトゥー族の人々が生活を営んでいる。本研究では、2014年9月～10月と2015年8月～9月の2期間に、集落住民、および教師への半構造化インタビューと参与観察に加え、高校生と教師を対象としたアンケート調査を行った。最初の調査で、就学・就業の実態調査を、二度目の調査においては教育と仕事に対する意識調査を行った。

## 3. 結果と考察

ドイ集落において、就学率が向上していることが明らかとなった。初等教育においては、完全普及まで達しており、近年では高校を卒業している住民も3割を超えていた。しかしながら、多くの若者がたとえ高校を卒業していても、本人達の意思に相反して農林業に従事していた。高校卒業未満の住民においては、ほとんど全員が農林業従事者であり、非農業就業機会が減少していることが確認された。

住民は、教育に対して「知識の取得」や「より良い仕事・生活への繋がり」を求めていた。現在だけでなく、将来的な生活にも貢献することを期待しており、教育に生活を変えていく望みを託していることが示唆された。さらに、可能な限り高い段階の教育を受けさせることが集落内において定着しつつあることが分かった。

少数民族の生徒は自らの就業を困難にしているのは、経済状況等の家族や社会の要因であると、主に認識している一方で、キン族の教師は少数民族の個人の学力やベトナム語の能力などが要因であると認識しており、立場の違いにより大きなずれが生じていた。この認識の差異が少数民族の就業をより一層難しくしている可能性が考えられる。集落住民の就業に対する意識では、高校卒業未満の住民および、夫婦ともに農林業に従事している住民が、多岐に渡る問題意識を抱えており、彼らに向けた重点的なサポートが今後必要であると考えられる。